

talk

分断された都市からネオ・アパルトヘイト的都市へ

——エルサレムの都市地政学に関する考察——

ハイーム・ヤコビ

保井 啓志 訳

本日は講演にお越しくださり、どうもありがとうございます。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教授のハイーム・ヤコビです。本日は、「分断された都市からネオ・アパルトヘイト的都市へ：エルサレムの都市地政学に関する考察」と題し、エルサレムの都市地政学について、非シオニストのユダヤ人（イスラエル人）という立場から、報告をさせていただきます。

まず、私は「都市地政学」という言葉を使っています。というのも、都市というのは、さまざまな権力のベクトルが交差するアリーナ・場である、という点を理解することが重要だと考えているからです。それは、イスラエル人とパレスチナ人の間の国家的な紛争のように、経済的・文化的な変容という都市の実際の地理に関わる問題を伴うマクロなものである場合もあれば、その都市がそこに住む異なるコミュニティにとって持つ、象徴的、あるいは認知的な意味とも関係するベクトルでもあります。

もう一つ冒頭で確認しておきたいのは、私の出発点が批判的な立場にある、という点です。つまり、私に関心を持っているのは、権力関係がいかにして社会における空間や場所、関係性などを形づくっているのか、という点です。今日、特に前回の講演¹に参加された方々に向けて私が主張したいのは、入植者植民地主義的な都市性^{セトラー・コロニアルアーバニズム}というのは「産物」ではなく、「過程」だということです。つまり、都市とは作用と反作用が絶えず生じる、動的な場である、ということを理解する必要があります。そして、入植者植民地主義的な文脈で何が起きているのかを理解するためには、植民者だけでなく、被植民者も含めて、それぞれの主体がどのような権力を持っているのかを理解する必要があります。これが一つ目の重要な論点です。

さらに、今日の私の発表の中核になる点として、ぜひ言及しておきたいことがあります。

先行研究を見ると、植民地主義こそが植

民地状況における都市を規定する絶対的な要素だ、と論じられる傾向があります。しかし私は、今日の植民地主義を、新自由主義及び、民営化を抜きにして理解することはできないと考えています。それは植民地主義と矛盾するものではなく、むしろ、エルサレムのような都市を形づくる、補完的な権力のベクトルだと主張したいと思います。後ほど、いくつか具体例をお示しします。

概念的な観点から言うと、今日私が取り組みたいのは、「ネオ・アパルトヘイト的都市」という概念を用いることです。ここで言うネオ・アパルトヘイト的都市とは、アパルトヘイトが終わった、つまりポスト・アパルトヘイトだという意味ではありませんし、まったく新しい排除の形態を指しているわけでもありません。私が主張したいのは、たとえば南アフリカで知られているような古典的な形態のアパルトヘイトが、エルサレムを分析するための政治的かつ分析的なツールとして、どのように理解されるのか、という点です。そして、「ネオ」という言葉の意味は、私たちが知っている従来のアパルトヘイトとの違いを示すと同時に、^{ネオ}新自由主義的なベクトルを議論の中に組み込むためのものです。これが、今日の発表の前に、皆さんに覚えておいていただきたい重要な点です。

次に、エルサレムの歴史の中でも非常に劇的な瞬間に目を向けたいと思います。

1948年、イスラエル国家が建国された



図1 エルサレム旧市街の嘆きの壁を訪問するベンヤミン・ネタニヤフの様子

出典：Prime Minister's Office (2025)

とき、エルサレム、すなわち西エルサレムは、ユダヤ国家イスラエルの首都とされました。東エルサレムは、ヨルダン川西岸地区と同様に、ヨルダンの支配下にありましたが、1967年にイスラエルが東エルサレムを占領します。これは、イスラエルの地政学において非常に大きな変化でした。昨年から今日に至るまで続いている、ヨルダン川西岸地区の占領や植民地化という文脈の中でもそうですが、エルサレムについても、1967年の占領は今日に至る政治的状況を形づくる最も重要な出来事でした。

ここに示しているのは、皆さんもご存じだと思いますが、ベンヤミン・ネタニヤフです。彼の発言については、後ほど少し触れるかもしれませんが、そしてこちらが、東エルサレムが占領された当時のエルサレム市長だったテディ・コレクです。重要なことに、テディ・コレクは右派ではありませんでした。彼は、いわば主流派のリベラルでした。彼が理解していたのは、もし東エ



図2 元エルサレム市長テディ・コレクの著作。コレク自身が写っている。
出典：Kolek and Kolek (1979)

エルサレムをイスラエルの新たな首都の一部にしたいのであれば、とにかく建設、建設、建設であり、住宅、道路、インフラ、公共建築、新しい景観などを作り続ける必要がある、ということでした。つまり、建築、都市計画、開発が、エルサレムを統一された都市にしていくうえで、いかに重要かを、彼は非常に早い段階で認識していたのです。その背景には、ダヴィド・ベン＝グリオンの発言とも重なる考え方がありました。それは、いかなる犠牲を払ってでも、ユダヤ人を東エルサレムに移住させなければならない、というものです。何千人ものユダヤ人が、できるだけ早く入植すべきだ、と。ユダヤ人は、掘っ立て小屋であっても東エルサレムに住むことに同意するだろ

う。きちんとした住宅地区が建設されるのを待つべきではない。最も重要なのは、そこにユダヤ人が「いる」という事実なのだ、という考え方でした。この引用が重要なのは、人口工学、つまりパレスチナ人を排除し、ユダヤ人を東エルサレムに入植させるというプロジェクトが、国家的な目的であり、国家的な目標であった、ということがよく分かるからです。そしてそれが、たとえば、住宅が非常に手厚く補助されていたように、経済的にも強く支えられていた、という点です。そこから、驚くほど整備されたインフラも整えられました。道路が建設され、のちには路面電車が通り、公園がつくられ、公共建築、学校、大学も建設されました。これが一つの側面です。

しかし、ネタニヤフの発言を見ると、別の側面も見えてきます。これは2009年の古い例ですが、ネタニヤフは、「エルサレムはユダヤ民族にとって永遠の首都であり、二度と分断されることのないよう再統一された都市なのです……私たち民族がエルサレムに対して抱いてきた比類なき愛着は、何千年にもわたって続いてきました。エルサレムはユダヤ民族の永遠の首都であり、そしてそれこそが、私たちの国民的再生の基盤なのです。それは、世俗的な人々と宗教的な人々を含め、私たちの民族を一つに結びつけてきました。」と発言しています。実は今日でも、これは主流の考え方です。彼は、エルサレムはユダヤ民族の永遠の首都であり、二度と分断されることの

ない、再統一された都市だと言っています。ここから分かるのは、東エルサレムが「占領された空間」であるという理解から、「統一された都市」の一部へと、ナラティブが書き換えられてきた、ということです。そしてそれは右派だけでなく、主流派の人々の理解として、将来的にイスラエル人とパレスチナ人のあいだで都市を共有するという発想に、いかなる柔軟性・妥協も許さない形で、エルサレムをイスラエルの首都とみなす考え方です。しかし私は、1967年から今日に至るまで、この語りの本質は変わっていないと考えています。

私がエルサレムを「新しいアパルトヘイト都市」として論じ始めたとき、明らかに、この考えは、あまり好意的に受け取られませんでした。イスラエルの研究者だけではありません。正直に言うと、南アフリカの同僚の多くも、あまり快く思っていませんでした。文献を見ていて興味深いことに、研究者の間でも見解が分かれており、この考え方自体を否定する研究者もいました。南アフリカは古典的なアパルトヘイト国家であり、法制度そのものがアパルトヘイトを作り出していたのだ、と言います。一方で、過去の私自身も含むほかの研究者は、「アパルトヘイト化の過程」、つまり、徐々に進行する、掴み取られていくようなアパルトヘイトの過程があるのだ、と主張してきました。イスラエル全体、そして特にエルサレムにおいて、ゆっくりと、しかし確実に、アパルトヘイトに似た状況が形成さ

れていく過程が見られる、というわけです。さらに、マクディスイー²のようなパレスチナ人研究者は、イスラエルに明確な法的構造があるかどうかは重要ではない、と言います。重要なのは、事実上のアパルトヘイト国家であるかどうかです。つまり、同じ空間の中で、人々が人種的、民族的、あるいは国民的帰属に基づいて、異なる扱いを受けている、という点です。

ここから私は、この議論をさらに押し進め、問いを立てたいと思います。国家を超えて、都市という文脈の中で、アパルトヘイトについて考えることはできるのだろうか、と。なぜなら、アパルトヘイトがどのようにして作動するのか、特に、空間がどのようにしてアパルトヘイトの諸手段を通じて生産されるのかを理解する必要があるからです。それが事実上のものであれ、あるいは、正直に言えば、このプロセスが始まって以降、イスラエルは、パレスチナ人とイスラエル人のあいだの不平等を安定化させるための規制や制度を整備していく形の、より古典的なアパルトヘイト体制へと、ますます近づいているように私には見えます。私たちは、都市空間がどのように形づくられているのか、そして都市生活がどのように都市の政治経済と結びついているのかを見る必要があります。そうすることで、アパルトヘイトや入植者植民地主義を、新自由主義と結びつけて理解することが可能になります。

皆さんご存じかどうか分かりませんが、

「パレスチナを可視化する」というプロジェクトがあります。これはパレスチナ人活動家によるプロジェクトで、最近はあまり活動していませんが、とても素晴らしい活動を行っていました。彼らは、イスラエル・パレスチナ紛争に関わる概念や語彙を取り上げ、それを視覚化したのです。たとえば、その一つがアパルトヘイトです。これはヘブライ語で「ハフラダ(הפרדה)」と言います。ハフラダとは、分離、分断という意味です。私がイスラエルでこの講演を行ったときには、「アパルトヘイト」という言葉よりも、「ハフラダ」と言ったほうが、人々は受け入れやすいように感じました。しかし実際には、ヘブライ語のハフラダを訳すと、それはアパルトヘイトなのです。つまり、二つの存在を切り離す、分断する、という意味です。このプロジェクトでは、それが視覚化されています。重要なのは、二つの空間的な存在が、法的にも、空間的にも、そして物理的にも分断されている、という点です。そして分断されているのは空間だけではなく、人々そのものでもあります。

アパルトヘイトと都市との関係についてまず少しお話ししたいと思います。南アフリカの事例において都市は、アパルトヘイト体制の構築における主要な推進力の一つでした。多くの南アフリカの研究者や、ウルフ³のような入植者植民地主義に関する研究者たちは、アパルトヘイトが都市化とともに発展してきたことを明らかにしています。というのも、都市において、黒人と

白人がどこで、どのように接触するのかを考える必要があるからです。都市を機能させるためには、黒人の労働力が不可欠でした。その点については、非常に多くの研究があります。ただ、私がここで強調したいのは、もちろん農村部でもアパルトヘイトは機能していたものの、都市こそがアパルトヘイト体制にとって最大の課題だった、という点です。都市においてこそ、この体制が他の地域よりもはるかに苛烈で強固な形で作動していたのです。

さらに重要なのは、ポスト・アパルトヘイト期の南アフリカにおける新自由主義、あるいは自由主義が、黒人と白人のあいだの格差を解消あるいは縮小することはなかった、という点です。この意味で、新自由主義的なポスト・アパルトヘイト期の南アフリカは、「自由市場」や「民営化」といった理念が、いかにユートピア的な発想であるのかを、私たちに多く教えてくれます。なぜなら、南アフリカの事例において、それらは実際には平等を支持するものではなかったからです。この点について、アンディ・クラーノの『新自由主義的アパルトヘイト』は、南アフリカとイスラエル／パレスチナを比較した研究で、ポスト・アパルトヘイト期の南アフリカと、これから到来しつつあるイスラエル／パレスチナにおけるアパルトヘイトの類似性を示しています(Clarno 1994)。出版されたのはおよそ10年前で比較的古い本ですが、それでも非常に興味深い研究です。なぜなら、単な

る類似点だけでなく、たとえば労働力の役割、南アフリカとイスラエル／パレスチナの双方における労働の位置づけ、さらには空間や領土の役割といった点を丁寧に分析しているからです。このように、二つの事例を結びつけて考える研究が、少しずつ現れてきています。後ほど、他の事例についても少し触れたいと思います。

さて、ここで話をエルサレムに戻します。少し確認したいのですが、西エルサレムは、1967年までイスラエルの首都とされてきました。ここに引かれているグリーンラインが、西と東を分けていた境界線です。そして、この部分が占領された東エルサレム

です。黄色っぽく見える村落が分かりますでしょうか。これらがパレスチナ人の集落です。一方、青色で示されているのが、1967年以降に建設されたユダヤ人入植地です。この青い線がエルサレム市の行政境界です。この境界線は、土地を管理・支配するために設定されたものですが、その背後にある考え方は、できるだけ多くのパレスチナ人を排除する、というものでした。

私は、1967年以降のエルサレムの展開を、四つの段階に分類しています。第一段階は、境界設定と土地の接収です。これは法的な枠組みを通じて行われました。先ほどもお話したように、目的は、できるだけ

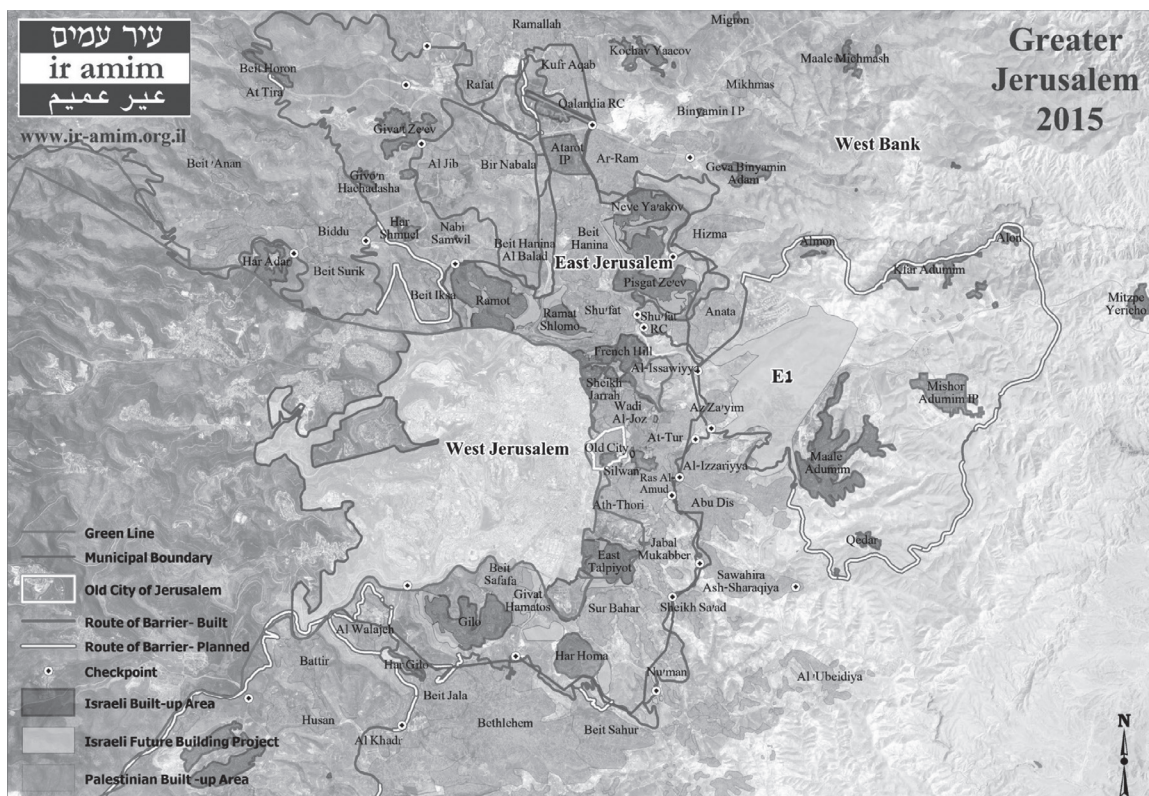


図3 エルサレム市周辺の行政区画や土地接収に関する地図。
出典：Ir Amim (2022)

け多くの土地を市域に組み込み、それを国有地へと転換することでした。そのためには、その土地移転を可能にする法的装置が必要だったのです。都市の境界設定とパレスチナ人の土地の接収は、東エルサレム植民地化の第一段階でした。

第二段階は、実際には第一段階と並行して進められたものですが、ユダヤ人入植地、あるいは住宅地区の、大規模な建設計画です。ここに見える青色の地区がそれに当たります。これらの住宅地や入植地は、先ほども述べたように、ユダヤ人を移住させ、そこに住ませるために、国家による補助を受けて建設されました。その目的は、パレスチナ人の空間同士を分断することでした。そこでは、パレスチナ人の居住地区が拡張できないように都市が設計されています。この点は、今日に至るまで、非常に重要な意味を持っています。さらに、都市計画の観点からイスラエルが行っているもう一つ重要なことは、「緑地」、つまり自然的価値を持つ空間を指定することです。たとえば、ここに見えるような地域の一部は、もともとパレスチナ人の土地でしたが、緑地として指定されることで、パレスチナ人の居住地の拡大を阻止する役割を果たしています。もちろん、自然や環境に価値がないと言っているわけではありません。しかし、東エルサレムにおける緑地の配置を見れば、パレスチナ人居住区の発展を阻むために、意図的に多くの緑地が設定されていることが明らかです。

第三段階は、分離壁の建設です。地図中では赤い線で示されているのがその壁で、2002年以降に建設されました。私は、これを「治安の壁」⁴だとは考えていません。むしろ、治安という言葉を用いながら進められた、インフラ整備プロジェクトとして理解する必要があると思っています。つまり、安全保障が、この壁を建設するための「理由」として使われた、ということです。ただし私は、この壁がイスラエル人とパレスチナ人を分けているのではない、という点を強調したいと思います。実際に分断されているのは、エルサレム内部に住むパレスチナ人と、エルサレムの外側、西岸地区に住むパレスチナ人です。この点については、後ほどもう一度、簡単に言及したいと思います。

そして最後に、現在私たちが目にしている第四段階、それが「パレスチナ人ゲットーの最前線化」です。基本的に、エルサレムの市域内には、シルワーン、ラス・アル＝アムード、シュアファート、シェイク・ジャッラーフといった、小規模なパレスチナ人居住区があります。これらの地区はエルサレム市の行政区域内にありますが、土地の収奪や都市計画上の規制などによって、拡張することができません。その結果、これらの地区は、最も過激な右翼の入植者組織の標的となってきました。シェイク・ジャッラーフやシルワーンに関するニュースを追っている方なら分かると思いますが、これらの地区は、東エルサレムにおけ

る植民地プロジェクトの最前線になっているのです。

ここで非常に興味深いのは、東エルサレムや西岸地区の「占領」の段階、そしてその後、イスラエル人ユダヤ人を東エルサレムに移住させるという「植民地化」の段階を経て、現在私たちが直面しているのは「アパルトヘイト化」の段階だという点です。つまり、エルサレム市内のパレスチナ人居住区を管理・支配し、空間的な分離や分断を作り出すだけでなく、経済的移動可能性などの面でも、分断を生み出そうとするプロセスです。1967年当初、パレスチナ人は「敵」として語られていました。しかし現在見られるのは、人種化のプロセスです。つまり、パレスチナ人を一つの人種的集団として理解し、分類する動きです。イスラエルのニュースを見れば、特に高度な研究者でなくても、パレスチナ人がどのように非人間化され、メディアの中で描写されているかが分かります。そこから見えてくるのは、彼らを排除された存在として、いや、単に排除されているだけでなく、権利を持たない集団として刻印しようとするプロジェクトです。

そして、最も重要で興味深い政治的事実は、1967年以降、エルサレムの植民地化がイスラエル国家的プロジェクトだったのに対し、現在では、国家が植民地化の権限を、主に右翼の入植者団体へと移転している、という点です。先ほど触れたテディ・コレクの時代には、国家こそが、住宅地を

つくり、道路を敷き、インフラを整備することを通じて、都市の植民地化を実行する主体でした。しかし今日では、国家がその「汚れ仕事」を非政府組織に委ねるプロセスが見られます。これが、私の考えるネオ・アパルトヘイトの特徴です。国家は、「私たちのせいではない。過激な右翼入植者たちが勝手にやっていることだ」と言うわけです。しかし、これらの組織は、経済的には確実に、そして政治的にも国家によって支えられており、これは意図的な権限移譲のプロセスなのです。こうした空間的な変化は、政治的变化、構造的変化、そして言説的变化と結びついて進行している、ということがここから見て取れます。

では、ここから、地図で示した大きな全体像を、三つの、いわば古典的な都市的要素を通して説明したいと思います。一つ目は住宅です。エルサレムでは、二つのプロセスが同時に進行しています。一つは^{デ・デベロプメント}「反開発」です。これは、パレスチナ人の空間を意図的に未開発の状態に留め置くことを意味します。下水道もなく、水道もなく、道路もなく、建築許可も出ないため、住宅を建てることができません。また、先ほど述べたように、イスラエルはパレスチナ人の建設を阻止するために、緑地を指定しています。緑地に囲まれたパレスチナ人の村・居住区シルワーンや、広大な緑地として指定されているスコープス山の事例など、旧市街周辺には、非常に分かりやすい例が見受けられます。緑地は確かに重要で

す。しかし、私たちはここで自問する必要があります。その性質はどうか、誰がどのような判断をしたのか。そして、その判断は非常に政治的なものでした。なぜなら、これらは本来、パレスチナ人居住区が拡張できたはずの潜在的な空間だったからです。

一方で、「過剰開発」^{ハイパー}も見受けられます。エルサレム全体が、過去10年から15年にかけて、ある種の狂氣的とも言える開発を経験しています。そこには、非常に強い新自由主義の論理があります。とにかく建てろ、建てろ、建てろ。開発業者や民間資本に、ほとんど制御なしに権限を与えるのです。私は、かつての博士課程の学生の一人と、「反開発」と「過剰開発」という概念について共著論文を書きました。たとえば、私は、西エルサレム中心部にあるマンションがどのように販売されているのかを調べるプロジェクトを行いました。すると非常に興味深いことが分かりました。海外に住むユダヤ人の間で、西エルサレム、さらには東エルサレムの不動産に投資する動きが増えているのです。彼ら自身がそう語ってくれましたが、重要なのは、エルサレムが「ユダヤ人の空間」として、どのようにマーケティングされているか、という点です。たとえば、マンチェスターに住む裕福なユダヤ人家庭が、「では、エルサレムに不動産を買おうか。永遠のユダヤ人の首都だから」と考えるわけです。それらの物件はとも洗練され、高級な居住空間で、ジムも

バーもあり、都市の中心にあるゲーテッド・コミュニティ⁵のようなものとして売り出されています。しかし、これらの住戸の多くは、年間を通じて人が住まれているわけではありません。ユダヤ教の祝祭の時期に、年に二度ほど使われるだけで、ほとんどの時間は空き家です。その一方で、パレスチナ人側では、住む場所も、住居も不足しています。しかも私がこの写真を撮った当時よりも、今日ではさらにそれが加速しています。

このように、反開発と過剰開発が同時に進行することで、東エルサレムの「ユダヤ化」という構想が見えてきます。例えば、フレンチ・ヒル地区の一部は、1967年以降、ユダヤ人のために最初に建設された立派な高級住宅地である一方、パレスチナ人の地区では、イスラエルの規制上「非合法」とされる、非公式な建築が広がっています。これが、パレスチナ人が生きていくための唯一の方法なのです。たとえば東エルサレムのパレスチナ人が居住する地区シルワーンのように、非常に興味深いのは、分離壁の建設以降、西岸地区からエルサレムへのパレスチナ人の内部移動が起きている点です。彼らはエルサレム住民としてのIDを失うことを恐れていました。その結果、パレスチナ人居住区の地価は40%も上昇しました。これは本当に異常な数字です。パレスチナ人はエルサレムに移動しましたが、そこで深刻な住宅問題に直面することになりました。この点については、後ほど

もう少し詳しくお話しします。

私は、エルサレムのとある通りで、衝撃的なポスターを目にしました。「パレスチナ人に家や不動産を売るな」という内容のものです。これは、南アフリカで私たちがよく知っている考え方と明確につながる、きわめて人種主義的な表現です。その背景には、こうした事情があります。西岸地区からエルサレムに移動してきたパレスチナ人たちは、先ほどお話ししたように、土地価格が40%も上昇する中で生活しなければならなくなりました。しかも、パレスチナ人は、イスラエル人が市内で行えるような形で建物を建てることができません。そのため、エルサレムに移動してきたパレスチナ人にとって、唯一の選択肢は、まずユダヤ人の居住区で暮らし、その後ユダヤ人の居住区で家を借りつづける、あるいはユダヤ人の居住区で家を購入することでした。これは、私が言うところのアパートヘイトの論理を壊す行為でもあり、この点については、後ほど少し触れたいと思います。

もう一つ、アパートヘイト体制と新自由主義体制のあいだにある矛盾や緊張関係が非常によく表れている領域が、雇用です。1990年代から2010年代に至るまで、エルサレムの労働市場に参加するパレスチナ人の数は増加しています。また、彼らの賃金も上昇していることが分かります。劇的な上昇ではありませんが、一定の上昇が見られます。しかし同時に、重要なことに、パレスチナ人とユダヤ人の所得水準のあいだ

には、常に格差が維持されていることもまた事実であることが、統計的データを見るとわかります。ここでも、新自由主義化と労働市場の開放が、より多くのパレスチナ人の参加を可能にしている一方で、彼らが安価な労働力として位置づけられていること、そして経済構造そのものが所得格差を維持していることが分かります。パレスチナ人は主に商業分野や、修理、小間使いの職業に就いており、社会的地位の高い職種ではありません。建設業では、パレスチナ人が主要な労働力を担っています。また興味深いことに、保健・福祉分野でも多くのパレスチナ人が働いています。イスラエルでは、薬局や医療サービスの現場で、パレスチナ人の姿をよく見かけます。理由は単純で、イスラエル人よりも安価な労働力だからです。それ以外の理由はありません。一方、ハイテク産業を見ると、パレスチナ人の存在はほとんど見られません。行政職においても同様です。ここには、どのような社会経済的プロファイルが形成されているのかが、非常にはっきりと表れています。

さらに、分離壁の建設以降、パレスチナ人はエルサレムの東から西へと境界を越えて移動するようになりました。西エルサレムには大学や単科大学、雇用センターといった、イスラエル系ユダヤ人の機関があり、パレスチナ人は、そこで働いています。西エルサレムの公共空間におけるパレスチナ人の存在感は、ますます高まっています。先ほど触れたように、西エルサレムにある

マハネ・イエフダ市場でも、パレスチナ人が働く姿を、ますます頻繁に目にするようになりました。しかし同時に、都市空間におけるパレスチナ人の可視性と存在感が、どのような人種化を生み出しているのかを見ることがもできます。

次の資料は人種主義的な右翼団体によるもので、パレスチナ人の存在があまりにも目立つようになったことに反応して、エルサレムの街中にこのようなポスターを貼り出したのです。「もしあなたが、娘の結婚式の招待状をこんなものにしたくないなら」という文言とともに、そこには「ムハンマドとミハル」という名前が書かれています。ムハンマドは、典型的なパレスチナ人・アラブ系の名前です。一方、ミハルは、最も典型的なイスラエル人女性の名前です。つまり、「娘がパレスチナ人と結婚することを望まないなら、気をつけろ」というメッセージです。ここから分かるのは、都市空間におけるパレスチナ人の可視性と存在感が、人種化のプロセスを生み出している、ということです。そして、新自由主義化が、人種的資本主義、すなわち、民族的・人種的な分断に基づいて作動する資本主義が進行していることが分かります。これこそが、「新しいアパルトヘイト都市」の具体例であり、そこには、一定の機会がある一方で、同時に強い人種化のプロセスが存在しています。

エルサレムにおいて、もう一つ非常に重要な領域が、観光と商業活動です。これは、



図4 アラブ人排斥を求める極右団体レハヴァによる排外主義的なチラシ。
出典：Lehava (2026)

1967年に占領されたエルサレム旧市街について、イスラエル観光省が作成した地図です。旧市街は、エルサレムで最も美しい空間の一つです。ここでは詳しく立ち入りませんが、この地図には、旧市街にあるムスリムの聖地についての記述が一切ありません。この地図を使う観光客にとって、エルサレム旧市街は、ユダヤ教とキリスト教の土地でしかなく、ムスリムもパレスチナ人も存在しない空間として提示されています。また同時に、こうした記述の形成には、非常に大きな政治的圧力がかかっています。たとえば、観光省は、シルワーンの考古学遺跡を、ユダヤ的な語りのみを提示す



図5 イスラエル観光省が作成したエルサレム旧市街の絵地図
出典：Israel Ministry of Tourism (n.d.)

る場所として整備するために、多額の資金を投入しています。そこには、ビジターセンターの建設も含まれていますが、実際にはそれは観光客のためというよりも、シルワーンに住み始めた入植者のための施設となっています。このように、一見すると非常に実務的・官僚的に見える、都市の観光資源開発が、いかに政治的であるかが分かります。また、もう一つエルサレムの開発プロジェクトの中には、西エルサレムと旧市街を繋ぐモノレールの建設もありました。このプロジェクトの目的は、西側から旧市街へ、ユダヤ人が安全に移動できるルートを作ることでした。しかし、この巨

大な建設によって生じる被害は、明らかにパレスチナ人の土地に集中しています。しかし最終的には、このプロジェクトは人権団体からの圧力によって、幸いにも承認されませんでした。

基本的に、現在のエルサレムには、二つの選択肢があります。一つは、ネオ・アパルトヘイト的都市であり続けることです。もう一つは、^{バイナショナル}二民族的な都市です。今日のエルサレムには、パレスチナ人とイスラエル人という二つのナショナル・グループが存在し、日常生活の中で都市を共有しています。パレスチナ人はそこで働き、イスラエル人入植者もそこで暮らしています。問

題は、私たちがこの現実とどう向き合うのか、という点です。私は、イスラエル人とパレスチナ人のあいだの和平は、最終的にはパレスチナ国家の樹立を伴うものになると考えています。それが30年後なのか、100年後なのかは分かりません。しかし、その国家は、1967年にイスラエルが占領した土地の上に成立することになるでしょう。エルサレムについて言えば、私は、エルサレムという都市は、「分離」という発想そのものを問い直す空間になるのではないかと考えています。パレスチナ人が住む場所、イスラエル人が住む場所を、本当に分けることができるのでしょうか。地理的にも、人口的にも、エルサレムを分断することはできません。都市を分けることは不可能なのです。だからこそ重要になるのは、エルサレムが二つの国家の共有首都になることです。正直に言えば、今日の状況では非常にユートピア的に聞こえるかもしれませんが、将来的には、これがエルサレムにとってほぼ唯一残された解決策になるのではないかと私は考えています。

残念ながら、現在イスラエルは、ネオ・



図6 ヘブライ語とアラビア語双方でエルサレム市の方向を表す標識
出典：Zochrot (2015)

アパートヘイト的都市というパラダイムへと進む道を選択しています。その一例として、ユダヤ人用とパレスチナ人用に分けられた道路があります。これは、きわめて典型的なネオ・アパートヘイトの装置です。次に示した道路標識はエルサレムを示したのですが、私はこの標識がとても好きです。ヘブライ語で「イエルシャライム (ירושלים)」、アラビア語で「アル＝クドゥス (القدس)」と書かれています。というのも、結局のところ、エルサレムは実践のレベルでは、すでに共有された都市だからです。平等な条件ではありませんが、それでも、イスラエル人とパレスチナ人が共存する潜在性を持っています。ここでパレスチナ側の呼称の問題にはあまり深く立ち入りませんが、この言語の問題自体にも、非常に強い政治性があります。パレスチナ人は普段、エルサレムを「アル＝クドゥス」、つまり「聖域」と普段読んでいますが、イスラエル側は、アラビア語で表記する際にも、ヘブライ語の「イエルシャライム」に近い「ウルシャリーム (أورشليم)」という表記を用いています。ただ、ここから理解できるのは、明確な解決策が存在し、それには強い政治的意思と、地域全体における戦略的な変化が必要になります。そして私は、エルサレムこそが、イスラエル／パレスチナにおいて、どのように共有空間を構築しうるのかを示す、先駆的な事例として理解されるべきだと考えています。

さて、まとめに入りたいと思います。こ

ここで示す結論の中には、広く一般的で理論的なものもあれば、非常に具体的なものもあります。まず、今日お伝えしようとしたのは、都市アパルトヘイトは偶然に起こるものではない、という点です。それは意図的なものであり、イデオロギー的であり、政治、そして文脈の中にあるさまざまな権力関係に基づいています。

しかし同時に、私が示したように、都市のアパルトヘイトは動的な過程でもあります。エルサレムという都市において、パレスチナ人が平等な市民ではないからといって、彼らに主体性がないというわけではありません。そして、都市のアパルトヘイトは、農村部とは異なり、緊張やパラドックスを内包しています。一方には、分離し、分断し、管理しようとする試みがありますが、他方では、ある種の依存関係や、日常生活をめぐる交渉があります。

しかし、日常生活というものは、都市の政治の中では、しばしば重要でない要素として扱われます。それは個人の選択だと理解されるからです。たとえば、「私はパレスチナ人で、ユダヤ人居住区に住みたい。それは個人的な選択であって、イデオロギーではない。より良い住環境を求めているだけだ」というように。しかし、ネオ・アパルトヘイト的都市においては、こうした個々の選択が積み重なり、政治的、あるいは潜在的に政治的行為へと転化していく様子を見ることができるのです。現時点では、そこからは非常に遠いように見えるか

もしれませんが、私はこれこそが、ネオ・アパルトヘイト的都市の重要な特徴だと考えています。これらは静的なものではなく、ある時点で権力関係が変化したり、反転したりする可能性を内包しています。ここで、私たちが南アフリカの古典的なアパルトヘイト的都市と比べて、ネオ・アパルトヘイト的都市に見いだせる重要な違いは、一定の柔軟性の余地が存在するという点です。たとえば、私たちの事例ではパレスチナ人が、西エルサレムで働くことができます。もちろん、安価な労働力として扱われていますが、それでも働き、収入を得て、家族を支えることができます。また、パレスチナ人は、エルサレムにおけるパレスチナ人として居住する権利を失わないために、都市に居住し続けています。したがって、重要なのは、これがいつ、都市への権利を求める集合的な要求へと転化するか、という点です。そして、アパルトヘイト的都市は、国家だけによって作られるのではなく、入植者組織のように高度に民営化された、さまざまな政治的イニシアチブによっても形成されている、ということを理解する必要があります。

最後に本講演のまとめとして強調したいのは、ネオ・アパルトヘイト的都市性は、エルサレムや南アフリカだけの問題ではない、という点です。私自身、このテーマについて最初に読んだのは、『アメリカン・アパルトヘイト』という非常に優れた本でした (Massey and Denton 1993)。これは、

アメリカ合衆国における住宅市場と住宅政策に焦点を当て、1960年代以降、住宅規制がどのように黒人の白人居住区への移動を阻止し、あるいは移動が起きた場合に何が起こるのかを分析したものです。その後、「住宅危機の中でバンクーバーはアパルトヘイト的な都市になりつつある」という記事や、「グローバル都市化の競争の中で、都市は空間的アパルトヘイトを生み出す危険がある」といった議論も目にしました。また、「世界で最も分離された都市はどこか」というガーディアンの記事や、パリ郊外のバンリュールが、単なる分離ではなく、都市性のアパルトヘイトとして理解されるべきだという議論もあります。パリ中心部の住宅価格が高騰する中で、こうした傾向はますます強まっています。私は、この「アパルトヘイト」という、非常に強い意味を持つ言葉を使うことが重要だと思っています。多くの人はこの言葉を使うことを好みません。しかし、都市の政治、都市開発、比較都市研究に関心を持つ私たちにとって、この概念は、都市のプロセスをより批判的に捉えるための出発点になりうると考えています。

ご清聴、ありがとうございました。

特記

本稿は、2025年12月19日に開催された研究会の記録である。図や写真などは、講演者に出典を確認した。

訳者註

- 1 本研究会に先立って、2025年12月14日には、“From Separation to a Shared Homeland: Paradox (and hope) of Settler-Colonial Urbanism in Israel/Palestine” という題でヤコビ氏に講演いただいた。
- 2 パレスチナ人歴史家のウサーマ・マクディスイーのこと。イスラエルをアパルトヘイト国家としてみなすよう主張したとして知られている。
- 3 イギリス人歴史家のパトリック・ウルフのこと。入植者植民地主義の構造に関する理論構築に貢献し、入植者植民地主義研究の嚆矢として知られる。
- 4 「治安の壁」あるいは「安全のためのフェンス」という呼称は、イスラエル側が「分離壁」や「アパルトヘイト・ウォール」という呼称の代わりに「テロリスト攻撃からイスラエル人を守る安全保障名目、治安名目である」としてその建設を正当化するために頻繁に用いてきた、あるいは用いることを主張してきた呼び方である。
- 5 ゲーテッド・コミュニティとは、高い塀やフェンスで囲われ、出入り口にゲート（門）を設けて部外者の立ち入りを制限する住宅地のことで、住民以外の敷地内への出入りを制限することで部外者の流入を防ぎ、防犯性・治安・安全性を向上させたまちづくりの手法。

参考文献

- Clarno, Andy, 1994, *Neoliberal Apartheid: Palestine/Israel and South Africa after 1994*, Chicago: University of Chicago Press.
- Ir Amim, 2022, “Map of Greater Jerusalem 2022,” (Retrieved February, 16, 2026, <https://old.ir-amim.org.il/en/node/2764>).
- Israel Ministry of Tourism, n.d. “The Old City of Jerusalem.”
- Kolek, Teddy, and Amos Kolek, 1979, *Unified Jerusalem: A Life Story*, Maariv (In Hebrew).
- Lehava, 2026, “Lehava – For the Prevention of Assimilation in the Holy Land,” (Retrieved February, 16, 2026, <https://www.leava.co.il/>) (In Hebrew).
- Massey, Douglas, and Nancy Denton, 1993, *American Apartheid: Segregation and the Making of the Underclass*, Cambridge; London: Harvard University Press.
- Prime Minister’s Office, 2025, “PM Netanyahu and his wife went to the Western Wall in Jerusalem,” (Retrieved February, 16, 2026, <https://www.gov.il/en/pages/event-western-wall230625>).
- Zochrot, 2015, “With God’s Help, “Al-Quds” Is Being Erased from the Space and from Consciousness,” (Retrieved February, 16, 2026, https://www.zochrot.org/publication_articles/view/56366/he) (In Hebrew).